
キセキ ~ Angel of Memories ~

s a g i t t a

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

キセキ ～Angel of Memories～

【Nコード】

N2494A

【作者名】

Sagittta

【あらすじ】

天使の少年ミカエルと、恋人を失った少女真理の、ちょっと切ないクリスマスの物語。

プロローグ

闇。光が全くない状態。
「無いこと」を表すはずのそれは、しかし絶対的な存在感を持つてわれわれに襲い掛かる。

圧倒的な闇の中に投げ込まれた時、われわれはなす術を失う。
道は、光に照らされ、認識されてはじめて道たり得るものなのだ。完全なる闇の中では、道はその意味をなくし、前に進むことが意味を持たなくなる。前とはどちらだ？

闇を打ち消し得るもの、それはただひとつ。光に他ならない。
ただ光だけが、闇の中でも道を失わず、前に進むことができるのだ。

そこに、光があつた。

かすかな、ひと吹きで消えてしまいそうな、儂い輝き。
しかし、それは確かに光っていた。

「え？ オレがですか？ 何だつてそんなめんどくさいこと……」
光が発した、声。

その光は、人の姿をしていた。
否。人に似た姿をしていた。

二本の腕、二本の脚、そして頭。
それは確かに、人間と同じように見えた。
だが。

その背中から突き出した、一对の 翼。
そう、それは翼だった。

鳥のそれによく似た、小さな羽根が集まってできた翼。
純白のそれは、しかし、白鳥のものというより鷺の翼のような鋭さを備えていた。

「あ、いえ、やりますよ、やりますよ……はい、分かりまし

た」

光は、さらに言葉を続ける。

誰かと話しているのだろうか。しかし、その相手はどこにも見当たらない。

光が、不意に顔を上げた。いや、もはや光と呼ぶのはおかしいだろう。

その顔は、まだ若い、幼ささえ残る、少年のものだった。

翼を持った、少年。

見えない誰かとの会話を終えたのだろうか、少年は大きく伸びをして、はあ、とため息をついた。

「下ではクリスマスで浮かれてるってのに、また仕事かよ。まったく、あの方も人使いが荒いよなあ」

外見と同様に、幼い声。

彼はその顔に、幼さを残しながらそれでいて芯の強さを持ったその顔に、いたずらっぽい笑みを浮かべた。

「ま、愚痴っても仕方ないか。よし、今日は帰ってゲームやるよ」と

そう言い終わる前に、床を蹴って軽やかに走り出す。

彼は気づいているのだろうか。

自分が、大きな可能性を秘めていることを。

彼は気づいているのだろうか。

自分が 光っていることを。

彼が去った後の闇の中には、彼の残り香のように微かな輝きが残されていた。

それは、彼が落としていった、一枚の羽だった。

プロローグ（後書き）

先に書いた脚本を小説化したものなので、ストーリーは最後まで出
来上がっています。

これ以降も読んでくださると嬉しいです。

第一章

うつらかな昼下がり。

太陽の光はやさしく世界を照らし、青々とした葉の上の水滴がそれを受けてきらきらと輝く。

程よく暖かく穏やかな気候を喜ぶかのように、小鳥たちが軽やかに歌っている。

「……ということになります、だから、地上で肉体を失った人々の魂が空へと上がり……」

どこからか、人の声が聞こえた。

おそらく男性のものだろう。穏やかさの中に凜とした力強さを秘めた、そんな感覚を抱かせるような声。

誰かに語りかけているのだろうか、声は途切れることなく言葉を紡ぎ続ける。

「……つまりは、人の記憶というものが、魂をわれわれの姿に形づくっているとも言うべきで……」

声は、小鳥たちが歌う木々の傍らにある、古い建物の中から聞こえてきていた。

古い、しかししっかりとした石造りのその建物は、森の中に静かにそびえる教会であった。

教会の一室、窓から心地よい陽光が差し込む部屋に、声の主は立っていた。

学校の教室を思わせる部屋の端に置かれた教壇の上に立ち、黒い革張りの分厚い本を片手に、穏やかな表情で言葉を紡いでいる。

「……というわけで、われわれ天使は、人間の記憶によって存在しているのです。……ミカエル、聞いていますか？」

声の主　黒い僧衣に身を包んだ男性が、部屋にいるもう一人に声をかけた。

部屋の中にいたもう一人、ミカエルと呼ばれた少年は　机に突

っ伏して眠っていた。

確かに、窓からの優しく暖かな陽射しを受けて、部屋の中は程よく心地よい眠りを誘う空気を漂わせている。

「……はあ」

教科書の上によだれをたらしながら豪快に寝息を立てる少年の姿を見て、僧衣の男性はため息をついた。

相変わらず表情は穏やかだが、白い顔のこめかみに血管が浮き出ている。

僧衣の男性はそのまま、ツカツカと少年の眠りこける机の方に歩み寄った。

そして、無言で、手にしていた分厚い本をミカエルの頭の上に振り下ろす。

ゴンツ。鈍い音。

「いつ!!」

突然頭を襲った衝撃に、ミカエルが飛び上がって、そのまま頭を抱えてしまう。かなり痛かったらしい。

「なにす……」

突然の暴力に抗議の声を上げようと、顔を上げたミカエルの視界に入ったのは、僧衣の男性の満面の笑みだった。

天使の微笑とも言うべき非の打ち所のない穏やかな笑み。のよっうに見えるが、こめかみに浮き出た血管が、その内心を主張している。

「授業中に居眠りをするな、といつも言っているでしょう」

あくまでも、穏やかな声。だが、彼が穏やかであればあるほど恐ろしいということは、ミカエルには身に沁みてわかっていった。

「あなたは、明日のクリスマスに大切な仕事を仰せつかっているのですよ。もつと自覚を持ちなさい」

「は、は〜い、ラファエル先生」

急にしおらしい態度になって頭を下げる。あんな笑い方をするときの先生には、逆らわないのが一番いい。

僧衣の男性　ミカエルの上司であり先生でもあるラファエルも、ミカエルが素直に謝ればそれ以上怒るつもりはなかったらしい。くるりとミカエルに背を向けて、元通り何事もなかったかのように教壇に上がる。

その時、がらんがらん、と荘厳な鐘の音が響いてきた。授業の終わりを告げる教会の鐘の音だ。

「今日の授業はこれでおしまいです」

ラファエルはそう言って、手にしていた分厚い本　“Holy Bible”と書かれている　をパタン、と閉じた。

そしてミカエルの目を覗き込むようにして、こう付け加える。

「ミカエル。明日に備えて、今日は早く寝るのですよ」

ミカエルはというと、そんなラファエルの言葉が聞こえているのかい、慌しく勉強道具を白い革の鞆の中に詰め込んでいた。そして詰め終わるや否や、ガタツ、と大きな音を立てて椅子から立ち上がる。

「よっしゃ！　授業終わりっ！　早く家に帰って『ファイナルクエスト5』の続きやろうっ！」

そう言いおわる頃にはすでに走り出している。煙でも立てそうな勢いで、瞬く間に教室から走り去った。

「やれやれ……しょうがない子だ」

一人残されたラファエルは、誰にもなく呟いた。

その表情はあきれながらも、ミカエルに対する惜しみない愛情を感じさせる、優しさに満ちたものだ。

「おや？」

ラファエルが、何かに気づいたようにその身をかがめた。その手が床に落ちていた紙切れのようなものを拾い上げる。

「これは……指令書？　ミカエルが忘れて……」

小さく折りたたまれていたそれを、何気なく広げて眺めたラファエルの眉が、不意にひそめられた。

「これは……！」

そのまま何かをいぶかしむような表情をその顔に貼り付けて、目だけが紙切れの文字を追う。

紙切れに書かれた文字を読み終わったラファエルは、心を落ち着けるようにしばし瞑目した。その表情は先ほどまでの穏やかなものとはうって変わって、その眉間には深い溝が刻まれている。

不意に、ラファエルがその顔を上げた。部屋の天井を通してさらにその上を見通すように、その瞳が頭上のただ一点を見つめる。

「……主よ、これはあなたが彼に与えた試練なのですか」

視線の先の、見えない存在に訴えかけるように、祈るように、ラファエルの唇は言葉を奏でた。

それからゆっくりと目を閉じ、再び開かれた瞳は部屋の扉の向こう　ミカエルの出ていった方向を見据えていた。

「ミカエル。頑張るのですよ」

第二章

暗い部屋。

まだ日も高い時間、外は輝く陽光に満たされているというのに、部屋の窓には光を遮る分厚いカーテンが引かれ、部屋の中央にある蛍光灯にも光は灯されていない。

そんな暗く静かな部屋に、少女が一人いた。ブラシもかけていない長い黒髪の少女が一人、膝を抱えて座っている。

眠っているのだろうか？

いや、彼女の瞳は開かれていた。しかしその目は何も映してはいない。ただその虚ろな視線を、部屋の中に漂わせているのみであった。

「……リヨウ……」

少女が、喋った。いや、喋ったとはいえないかもしれない。ただ言葉が、音となって少女の唇から零れ落ちた。そんな感じだった。

「……リヨウ……」

再び零れ落ちる、言葉の雫。

自分の発した声に耳を傾けるように、ゆっくりとまばたきをする少女。彼女の目は、部屋の中ではなくどこか別の世界を見つめていた。

自分で意識しているのかどうか。彼女の右手がゆっくりと動き、自らの左手首につけた革製の腕輪に触れる。

そして彼女は愛おしそうに、それを優しく撫でた。まるでそこにあるはずの、誰かのぬくもりを確かめるかのように。

「もう、一年になるんだね……」

三たび、言葉が零れた。

少女の視線は、そこにはいない誰かに向けられている。

「ねえ、リヨウ、覚えてる？ この腕輪を買った日のこと。去年の

クリスマス」

見えない誰かに向かって語りかける少女の顔は、ひどくいとおしげで、ひどく、哀しげだった。

「来年のクリスマスには何を買おうかって、二人で色々話し合ったよね」

少女はなおも語りかける。永遠に返らないとわかっている返事を、期待するように。

「ねえ、リヨウ！……今日は、クリスマスだよ……」

最後の言葉はため息のように消えゆき、少女はがっくりとうなだれる。

あの日以来、何度も繰り返した行為。彼女に答えるのはいつも決まって、非情な静寂だけだった。

激しい虚無感に襲われた少女は、ゆっくりとまぶたを閉じた。少女の意識が、周囲の闇に溶けて拡散していく。

このまま、あたしの存在も、溶けてしまえばいいのに。

心の中でそう呟いた少女の意識も、だんだんと遠のいて行き

。「よし！ここで間違いない！」

場違いな、明るい声。

同時に、窓のカーテンが引かれ、闇に満たされていた部屋に、光が満ちる。

少女が、けだるげにまぶたを上げた。

いつの間にか部屋の中にいた声の主　ミカエルは部屋の中の少女に気づかないまま手元の紙切れに目を落としている。

「ええつと、ターゲットの名前は確か……かみの、しんり？　なんだか怪しげな宗教団体みたいな名前だな……」

素っ頓狂な声。それが少女のかたく閉ざされた心を、ゆっくりとほどいていく。

少女は半ば無意識に、傍らのバッグを手に取った。そのままそれを振りかぶり、突然の闖入者の頭に叩きつける。そのまますれバゴツ。

十分に勢いがついた中身たっぷりのバッグの一撃は、ミカエルの後頭部にジャストミートし、予想以上に鈍い音を響かせる。

「ここの、まりよ！ 失礼なこと言わないで！」

少女が、ミカエルに向かって叫んだ。これほどの強い感情をあらわにしたのが、ほとんど一年振りであるということ、少女は気づいていただろうか。

「いてててて……最近、叩かれてばっかだな……」

予想以上のダメージを受けたミカエルは、思わずその場にうずくまる。目にはうっすら涙が光っている。

「っていつか、あんた誰なのよ！」

怒りにまかせて叫んだ少女 真理の言葉に、ミカエルはさっきの痛みはどこへやら、待ってましたとばかりに飛び上がった。

「オレは、ミカエル！」

えっへんと胸を張って、ミカエルは名乗った。しかしそれは、真理の疑いの視線を強めただけであった。

「ミカエルう？ 何よそのふざけた名前！」

「ふざけた名前って何だよ！」

自分の名前をけなされて、ミカエルは口を尖らせた。しかし真理はミカエルのそんな様子など、目には入っていない。

「だいたいあんた、どこから入ってきたのよ！ ここはあたしの部屋よ！」

「どこからって、そこから」

ミカエルは悪びれるふうもなく、部屋の窓を指差した。確かに、部屋のガラス窓はいつの間にか開け放たれている。

あまりにあっけらかんと言うミカエルに、真理はしばらく口をぱくぱくさせていたが、我に返ったように顔を真っ赤にして、ミカエルにびしつと指を突きつけた。

「わかった！ あんた泥棒ね！ さっさと出ていかないと警察呼ぶわよ！」

「いやあ、そうしたいのはやまやまんだけどさあ。こっちも仕事

なんだよね。何もしないで帰ったりしたらなんて言われるか……」

ミカエルは、あくまで穏やかな表情、穏やかな口調で延々と説教をするラファエルの姿を思い浮かべてため息をついた。

真理は勿論、そんなミカエルの心中など知るわけもなく、ミカエルの言葉を聞いて眉間の縦じわをさらに深くする。

「仕事って……ははあ、お金を盗もつって魂胆ね！　そうはさせないわー！」

白いセーターの袖を肩までまくり上げて、ミカエルを睨みつける。真理のただならぬ雰囲気、ミカエルはあわてて両手を顔の高さに上げて、「お手上げ」のポーズをした。

「あ、いや、あの、そうじゃなくて……」

「じゃあ、なんなのよー！」

真理がミカエルに迫る。

「えっと、オレは……」

ミカエルはそこで、ひとつ息を吸い込んだ。姿勢を正し、表情を引き締める。

「オレは、君を救いに来た」

一瞬の間。

真剣に、まっすぐに真理の目を見つめるミカエル。

思わず目をそらせなくなった真理。

二人の視線が、交錯する。

沈黙を破ったのは真理だった。

「ばっ、と振りほどくようにミカエルの身体を突き飛ばす。頬が赤くなっているのは、怒りのためだろうか。」

「バツカじゃないの?!　頭おかしいんじゃない?」

ミカエルから目をそらしたまま、早口でまくし立てる。

「あ、いや、あのさ……」

「とにかく、あたしは泥棒にもストーカーにも用はないの!　とつとと出てって!」

そう言って、真理はミカエルの視線から逃げるように、背を向け

た。

「いや、泥棒でもストーカーでもなくてさ、オレ、一応天使なんだけど……」

「はぁ？ 天使？ ますます頭がおかしいみたいね！ いいから出てって！」

ミカエルの言葉に振り返った真理は、なおも言い募ろうとするミカエルを遮って、開け放たれた窓の方に彼を押しやった。……ここが二階であるということに、彼女が気づいているかどうか。

「ちょ、ちよつと待って！」

真理に押し出されそうになったミカエルが、思わず真理の両腕を掴む。自然、真理とミカエルが正面から向き合う形になった。顔をそらしていた真理もミカエルの方を向かざるを得ない。

「何すんのよ、離し……」

真理とミカエルの、目が合った。二人がそれぞれの顔をまじまじと見つめることになる。

ドクン。真理の心臓が、大きく波打った。

時が止まったかのように、真理はミカエルの顔から目を離せなくなる。

忘れもしない、胸が張り裂けるような懐かしさと暖かくて優しい切なさを同時に運んでくる、その顔。

ありえない。

そんなわけない。

けれど。真理は尋ねずにはいらなかった。

「リヨウ？ ……リヨウなの？」

しぼり出した真理の声は、震えていた。意味不明な問いに、ミカエルは首をかしげた。

「え？」

ミカエルは急に様子が変わった真理を、わけがわからない、という表情で見つめていた。

「……」

真理は、なおも言葉をしぼり出そうとする。しかし、それは言葉にならなかった。

唇をかんで、想いを振り切るように、ミカエルの手を振りほどく。……そんなわけないわ。リヨウは、リヨウはもう……」
引き結んだ唇から、言葉が零れ落ちる。同時に一筋の涙が、頬を伝った。

「あ、あの……」

その背中に掛けられた、ミカエルの声。真理は耐えるように、唇をかみしめた。

これ以上、ここにはいられない。彼の近くにいると、崩れてしまいそう。

「二度とあたしの前に現れないで」

必死の思いでそれだけ口にする、真理は逃げるように部屋を出た。全ての思いを断ち切るように。

「なんなんだ、いつたい……」

一人残されたミカエルは、呆然としていた。突然の真理の変わりよう。全くわけが解らない。

しかしそれよりも、真理の発した一言が、彼の胸を波立たせた。

「リヨウ……？」

その言葉は、喉に引っかかった魚の小骨のように、彼の胸の奥を引っ掻いていた。

何か大切な、暖かな感覚が浮かんでは消える。

それはまるで砂漠の塵気楼のように、近づこうとすれば遠ざかり、焦点が定まらない。そうでありながら、それはまた確固たる存在感を持って彼の胸を圧迫するのである。

「……何か、大切なことを忘れている気がする」

天使の少年は、少女の部屋の中でひとり呟いた。

第三章

昼下がりの、教会の中庭。

石造りの天使像を配した小さな噴水の傍らに木のベンチが置かれている。

午前の授業を終えたラファエルは、そこに腰掛けてひとときの読書を楽しんでいた。噴水を流れる水の音と、木々の葉が風に吹かれてそよそよとなる音が心地よい穏やかな午後。

「はあゝあ」

その穏やかな空間に似つかわしくない盛大なため息に、ラファエルはページをめくる手を止めて顔を上げた。

「どうしたんですか、ミカエル。ため息なんてついて」

見れば、隣のベンチに座ったミカエルが、噴水を見つめて浮かない顔をしている。

「あ、ラファエル先生……」

声をかけたラファエルに気づいて返したミカエルの声にも、いつもの元気がなかった。

「仕事に向かったのではなかったのですか？」

ラファエルは読みかけの本にしおりを挟むと、パタンと閉じた。そしてミカエルの方に向き直り、うつむいた彼の顔を覗き込んだ。生徒の仕事の悩みの相談に乗るのも、先生の大切な役目だ。

「行ったは行ったんですけど……」

「追い返されたんですか」

「……はい」

がつくりとうなだれるミカエル。そんな彼に、ラファエルは優しく微笑みかけた。

「一度で成功しようというのは、難しい話です。一度追い返されたくらいで、あきらめてはいけませんよ」

しかしその言葉も、ミカエルの浮かない顔を明るくさせることは

なかった。

「わかつてはいるんですけど……」

少しだけ顔を上げ、ラファエルにそう言つと、ため息をついてまたすぐにうつむいてしまう。

いつになく落ち込んでいるミカエルの様子に、ラファエルは軽く首をかしげた。

「何か、あつたんですか？」

「オレ、どうすればいいかわかんなくて……。あの子は、心に深い傷を負ってるんですよ？ そんなあの子に対して、オレにはいたい何ができるんだらう、って」

「……ミカエル」

純粹で真つ直ぐな彼だからこそ、悩み。あくまでも真剣なまなざしで語るミカエルを見て、ラファエルは顔をほころばせた。ミカエルはそれに気づく様子もなく、さらに話を続ける。

「天使なんていっても、オレには何の力もないし。あの子の傷を分かってやれるわけでもない。オレにできることなんて、何一つないんじゃないか、って。……分からないんです、何が正しい答えなのか」

ミカエルは、そう言つて悔しそうに唇を噛んだ。何もしてあげられない自分が、もどかしい。

「正しい答えなんて、あると思いますか？」

不意に、ラファエルが尋ねた。ミカエルが驚いたように顔を上げる。

「え……？」

「何が正しくて、何が間違っているのか。そんなものは誰にもわかりません。どの道を選んでも、もしかしたらそれが間違っているのかもしれない、そんな不安を抱きながら、それでも人は決断しなければならぬ」

ひとつひとつ、かみしめるように言葉を区切りながら語るラファエルに、ミカエルは小さくうなずいた。

「ミカエル、あなたはどうしたいですか？」

ミカエルの瞳を真っ直ぐに見つめて尋ねるラファエル。ミカエルは、目をそらさなかった。

「オレは……あの子の傷を、やわらげてあげたい。どうすればそうできるのかはわからないけど。……でも、なんかほっとけないんだ」

ミカエルの答えに、ラファエルは満足そうに目を細めた。

「ならば行きなさい、ミカエル。これはあなたが決断しなければならぬことです」

「オレが、決断しなきゃならないこと」

自分に言い聞かせるように、確かめるように繰り返す。ラファエルは彼を励ますように、ポンとその肩を叩いた。

「大丈夫、あなたならきっと彼女を救うことができます。いいえ、これはあなたにしかできないことなのです」

その言葉にミカエルは、ゆっくりと、しかし力強くうなずいた。

そしてくるりと背を向けると、走り出した。

振り返らずに、しっかりと前を見つめて。

第四章

真理は、冬の街にいた。

吐く息も白く、凍えるような寒さの静かな夜。

真理の隣には、彼がいた。

真理は、お気に入り白いコートに身を包んで、彼に寄り添うように身を寄せた。

ペアの腕輪なんて、ちょっと照れるなあ。

彼が言った。

まだ幼さの残る、少年の声。

「ふふ、そうだね。…でもうれしい」

真理は少しはにかんで笑った。

ああ。もしもいつか離ればなれになっても、これがあればお互いを感じられる気がするな。

「嫌だよ、離れるなんて」

すぐりつくように言った真理に、彼は優しく微笑みかけてくれた。

もしも、の話だよ。そんな顔するなって。

そう言って彼は、真理の髪を撫でた。彼のぬくもりが、穏やかに伝わってくる。

離れても、オレのこと忘れんなよ？

おどけて言った彼の言葉に、真理は強くうなずいた。

「忘れないよ、絶対」

すると彼は、リヨウは、静かに微笑んで。

不意に、目の前の光景が崩れた。

強い風に吹き散らされる砂のように、景色がさらさらと流れて消えていく。

なぜか少し哀しげな微笑を浮かべているリヨウの姿も。

「リヨウ！」

真理は消えゆくリヨウの姿をつなぎ止めるようにその両腕でリヨウを抱きしめようとする。

彼女がつかんだのは虚しい空白だった。意識が急に現実に引き戻される。

真理は、暗い部屋に一人で座っていた。

彼女が見ていたのは幻。

彼が隣にいたところの、幸せな、哀しい幻。

あの時は、リヨウと離れることになるなんて思っても見なかった。ずっと一緒にいられると思っていた。

離れても、オレのこと忘れんなよ？

頭の中を、リヨウの残した言葉だけが駆け巡る。

「リヨウ、……ねえ、あたしどうすればいいのかわかんないよ！」
膝を抱えたまま、絞り出すように少女は呟いた。

暗い部屋の中、少女のすすり泣く声だけが、いつまでも響き続けた。

第五章

それは、闇が人の姿を取ったものともいえるべきであろうか。

闇と同じ色のスーツを身にまとったその人影は、しかし服の色のためではなく、その内側の雰囲気のために、闇の中に深く溶け込んでいた。

彼の名はメフィストフェレス。

光から生まれた天使たちとは対照的に、深い闇の中から生まれた存在。

彼の正体は、悪魔であった。

悪魔たちはそれぞれ特殊な能力をその身に宿し、深き闇の中で暗躍していた。

彼らの目的は、誰も知らない。もしかしたら、彼ら自身さえも。

メフィストフェレス、通称メフィストが司っているのは、人間の記憶であった。彼の役目は、絶望した人間の記憶を消すこと。

「……了解しました」

彼が、誰かに向けて深々と頭を垂れた。その顔に浮かぶ感情は、深い尊敬と、畏怖。

会話の相手は見あたらぬ。メフィストの前に広がるのは、果てしない闇。

メフィストは、最後にもう一度、闇に向かって一礼するとその身を翻し、闇に消えた。

誰かの気配を感じて、真理は身を起こした。

意識がはつきりとしぬい。どうやら、泣き疲れて眠ってしまったらしい。

重い目蓋を、どうにか持ち上げてみる。目を開いては見たものの、あたりはやはり闇の中。

自分が本当に目を開いているのかどうかさえ、よくわからなくなってくる。

そんな濃厚な、闇。

「何かお悩みのようですね、お嬢さん」

不意に、闇が声を発した。地の底から響くような、低く張りのある声。

喋ったのは、闇の中に溶け込んだ、闇色のスーツをまとった人影だった。

真理はバツと身を固くする。

「誰っ？」

闇の中を見据えるように目を凝らす。闇の中のその人影は、笑ったようだった。

「おや、驚かせてしまったようですね。これは失礼いたしました」
人影は、芝居がかった動作で一礼する。

「申し遅れました。わたくし、こういうものです。以後お見知りおきを」

スーツの胸ポケットから一枚の名刺を取り出し、真理に向かって恭しく差し出す。白い紙の名刺は、闇の中でやけに明るく、光って見えた。

優雅な、しかし有無を言わせぬ雰囲気をもった彼の言動に、真理は思わず名刺を受け取っていた。そのまま、ほとんど反射的に受け取った名刺に視線を落とす。

「メモリアル、コンサルタント……？」

「いかにも。メモリアル・コンサルタント、すなわち『記憶相談員』のクロサキでございます」

そう言って、スーツの人影　クロサキは、再び一礼した。そして身をかがめ、座り込んでいる真理の瞳を覗き込んだ。

「お嬢さん、あなたは悲しい記憶をお持ちのようだ。……最近、大切な方を亡くされた、とか？」

頭の中に直接響いてくるようなクロサキの言葉に、真理はハツと

身を強張らせた。射抜くような視線でクロサキの瞳を見つめ返す。クロサキはそんな真理の視線を意に介した様子もなく、大袈裟に哀しげな表情を作って見せた。

「……やはりそうなのですね。あなたの瞳の奥には、深い悲しみが宿っていらつしやいます。たとえ顔は笑っていても、その悲しみの光は決して消えることはない」

そう言っつて肩をすくめてみせるクロサキ。真理は彼から目をそらし、うつむいて唇を噛む。

「ですが、このわたくし、その深い深い悲しみを消すことができません」

幼い子供に言い聞かせるように、甘く優しい声でクロサキは言った。弾かれたように、真理がその顔を上げてクロサキを見つめる。

クロサキはそれを確認して、満足そうに唇の端を上げた。そして真理の瞳をじつと見つめ、さらに優しい声を出す。

「あなたの悲しみの記憶を、消すのです」

「……記憶、を？」

絞り出すように声を上げた真理に、クロサキはゆっくりとうなずいた。

「ええ。悲しい記憶を消し、そんなことははじめから存在しなかったことにしてしまえばよいのです。そうすればあなたは悲しみから解放されます」

「……はじめから、存在しなかったことにしてしまおう……」

「どうですか？ あなたも悲しみから解放されたいと願っているんでしょう？」

クロサキがあくまで優しく、しかし強く、真理に迫ってくる。

心臓が早鐘を打っている。頭の中に霞がかかったようで、うまくものを考えられない。

頭の片隅に、微かに言葉が浮かんだ。真理はそれを必死で捕らえ、口に出した。

「でも……でも、リョウウが」

真理の言葉に、クロサキは眉をピクリと震わせた。小さく舌打ちをしたようにも思えたが、真理にはよくわからなかった。

「お嬢さん、残念なことですが彼は死んだのです。そして後に残ったのは、彼を失った喪失感と悲しい記憶。それならばはじめから会わなかったことにしてしまえば、そうすれば、喪失感も悲しみも、全て消え去ります」

クロサキの言葉は麻薬のように真理を酔わせ、引き込もうとする。しかし、真理の頭の片隅に残った彼の名前だけが、ちくりと胸を刺す針のように真理の心を引きとめ、彼女が甘い誘惑に身を委ねることを許さなかった。

「その……考えさせて欲しい」

真理の言葉に、クロサキは驚いたように眉をひそめた。しかし、すぐに余裕のある笑みを取り戻し、ゆっくりとうなずいた。

「ええ、いいですよ。じっくりと考えてください。……心が決まったら、その名刺に書いてある番号に連絡してください」

クロサキは、最後にひとつ優雅に一礼をして、来たときと同じように闇に溶けるように消え去った。

第六章

真理は、動けなかった。

頭ははつきりしているのに、身体は少しも言う事を聞いてくれない。

彼女の目の前には、あの日の光景が広がっていた。

太陽が沈んだばかりで、薄暗くなり始めた冬の黄昏時の街。会社の終業時刻を迎え、仕事を終えた人々が足早に帰途につく、交差点の前。

何度も見た、光景。

真理はその光景から逃れようと、目を閉じようとするが、まぶたさえも彼女の思い通りには動いてくれなかった。

嫌だ。この先は見たくない。

心の中で悲痛な叫びを上げる真理をあざ笑うかのように、情景はとどまることなく流れていく。

交差点の向こう側に、一人の少年が姿を現した。無機質に街を行く人々の中で彼だけが、まるでその身体からまばゆい光を放っているかのように、はつきりと際立っていた。

「リヨウ……」

真理の唇から、声にならない声が、零れた。

必死の思いで彼に呼びかける真理に、少年が気づくことはなかった。彼はしきりに時計を気にした様子で、交差点の信号が青に変わるのを待っているようだった。

「リヨウ！……来ちゃだめ！」

真理の叫びはしかし、やはり声にならなかった。

この先に何が起こるのか、真理にはわかっていなかった。

なんとしてもリヨウを止めなくちゃ。

心臓は高鳴り、頭がカツと熱くなる。

しかし、体はびくりとも動かない。叫び声が、音になる事もない。

交差点の信号が、青に変わった。

少年が、横断歩道に足を踏み出した。

そこに、赤信号を無視して急加速したオートバイが迫った。

急ブレーキの音が、響いた。

すべてが映画のコマ送りのように、真理の眼前で進んでいく。

「リヨウ！」

ふたたび、声にならない叫び。

だがそれは、すでに定められた運命を変えることはできなかった。

猛スピードで走っているはずのオートバイが、まるでスローモーション

シヨンを見ているかのようにゆっくりと、少年に迫る。

気付いた少年がそれを避けようとするが、その動きも極めて緩慢

なものだ。

少年がバイクを避けられない事は、誰の目にも明らかだった。

「！」

真理の視界が、紅く染まった。

遠のく彼女の意識の片隅で、耳障りな救急車のサイレンの音だけ

が、いつまでも響いていた。

「はあ、はあ、はあ……」

真理は、自分の荒い息で目を覚ました。いつの間にか眠ってしま

っていたらしい。全身にびっしりと冷たい汗をかいている。

いつものことだ。あの日から一年になるが、悪夢を見なかった日

は一日としてない。

とはいえ、胸の張り裂けるような、頭の中をかき回されるような

不快感は、毎日感じてても決して慣れることはなかった。

「……リヨウ」

真理は、血を吐くように、苦しげにその名を呟いた。

気づけば頬が濡れている。それもいつものことだ。

全身を駆け巡る行き場のない激しい感情の捌け口を求めるように、

真理は唇を噛み、強く握った拳をベッドに叩きつけた。金属製のス

プリングが、軋んだ音を立てる。

その時ふと違和感を覚えて、真理は握り締めていた拳を開いた。開いた拳の中から、くしゃくしゃになった紙切れが出てくる。いつの間にか握り締めていたらしい。

それは、クロサキと名乗る男が置いていった、名刺だった。

唐突に、真理の頭の中でクロサキの言葉が甦った。

『悲しい記憶を消し、そんなことははじめから存在しなかったことにしてしまえばよいのです。そうすればあなたは悲しみから解放されます』

半ばマヒした真理の渴いた心に、甘美な香りをまとったクロサキの悪魔メフィストの言葉が、ゆっくりと沁み込んでいく。

「リヨウ……」

もう一度、すぐるように彼の名を呼んだ真理の声は、弱々しく、震えていた。

そして彼女の声に応えるものは、ただ静寂のみだった。

「……」

真理は、くしゃくしゃの名刺を虚ろな瞳で見つめ、かたわらの携帯電話に手を伸ばした。

彼女の震える指が、ゆっくりと、携帯電話のボタンを押し始めた。

第七章

ミカエルは再び真理の部屋の、窓の前まで来ていた。

真理の部屋は2階。つまりミカエルがいるのは真理の家の、屋根の上である。

窓にはやはり分厚いカーテンがぴったりと閉じられ、中の様子を見る事ができない。

「オレがやらなきゃいけないんだ」

ミカエルは自分に言い聞かせるように呟くと、窓に手をかけた。

部屋の主はおそらくそんなことに気が回らないのだろう、窓の鍵はやはり開いたままだ。

「よしっ」

ミカエルは自分の頬を両手でパシッと叩いて気合を入れると、真理の部屋の窓を勢いよく開けた。

暗い部屋の中に、光が満ちた。

ミカエルは、いそいそと靴を脱いで部屋に上がると、部屋の中を見渡した。

真理は、ミカエルが前に来たときとほとんど変わらない位置に、ほとんど変わらない格好で座っていた。そしてやはりあの時と同じように、眠っているようではいながら、しかし目は開いていた。虚ろな視線を部屋の中に漂わせながら真理は、部屋の隅で小さくなっていった。彼女はミカエルが突然部屋の中に現れたというのに、ほとんど反応した様子がない。

真理の憔悴しきった虚ろな表情に、ミカエルはキリリと胸が痛むのを感じた。いてもたってもいられなくなって、ミカエルは真理に声をかける。

「や、やあ！」

ミカエルの裏返った声は、幻覚の中を漂う真理の意識を、わずかに引き戻したようだった。真理が、けだるげな動作でその首をミカ

エルの方にゆっくりと向ける。

真理が、ミカエルを見た。いや、見たとは言えないかもしれない。その視界の中に、ミカエルを入れただけ。真理の瞳の焦点は、どこにも合わされていない。

「……何しに来たの？」

かすれた声。泣き疲れた後のような。

「あ、あのさ、落ち込んでたって何も始まらないよ。ほら、元気出してさ！」

ミカエルが、部屋に満ちた静寂をかき消そうとするように、勢い込んで言った。

真理の返事は、ない。

「ほ、ほら、よく言うじゃない！ 笑うかどには福来る、って！ ほら、笑って笑って！」

裏返った声で、引きつった笑顔を真理に向けるミカエル。

真理は、反応した様子さえない。

何も映さない真理の空虚な瞳に見据えられ、ミカエルは言葉に詰まってしまった。

そんなミカエルに対して、真理はそれきり興味を失ったように、その視線を再び部屋の中に漂わせた。

「よ、よーし！ それならとっておきを出しちゃうぞ！ ミカエル、一発芸しまーす！ はい、注目ー！」

ミカエルはピン、と右手を上げた。そしてごそごそとジーンズのポケットをさぐり始める。

「びっくりして、耳が大きくなっちゃったよー！ あははー！」

ミカエルはポケットからプラスチック製の大きな耳を取り出して自分の耳にはめてみせた。そして渴いた笑いをその顔に浮かべる。

もちろん、真理が笑うはずもない。

ミカエルの作り笑いが、虚しく部屋を漂った。

「おもしろく……ないよね、は、はは……はあ」

ミカエルはがっくりと肩を落としてため息をついた。

「うーん、困ったなあ……」

右手でプラスチックの耳を寂しげにポケットにしまいながら、ミカエルは余った左手で決まり悪げに頭をかいた。

「！」

突然、立ち上がった真理がミカエルの左手を掴んだ。

「なな、なに？」

真理の突然の行動に、ミカエルは驚きの声を上げる。

「その腕輪……」

真理がかすれた声を出した。ミカエルの腕にすぎり、憑かれたようにその手首に巻かれた革の腕輪を撫でる。

「ああ、これ？」

真理の言葉に、ミカエルは自分の左手首に視線を落とした。

「なんか気がついたらしてたんだよね。いつからしてたのかとか、誰にもらったのかとか、思い出せないんだ……」

自分の記憶を探ろうとすると、頭の奥を針で刺すようなちくりとした痛みがミカエルを襲う。

そんな彼に対して真理が言った言葉は、予想もしない、意外なものだった。

「あたしが……あげたの」

「え？」

あまりに意外な真理の言葉に、ミカエルは素っ頓狂な声を上げた。怪訝な表情のミカエルに真理は、自分の着ているセーターの左腕の袖をまくって見せた。

セーターの下から現れた革製の腕輪は、ミカエルの左手首の腕輪と瓜二つだった。

「それ……同じだ」

ミカエルの眩きに、真理はこくりとうなずいた。そしてミカエルの腕を取り、何かを探すように腕輪を見つめた。

「ほら、ここにMの字が彫ってある」

「あ、ほんとだ……」

よく見てみると、ミカエルの腕にはめられた腕輪の金属の部分に、小さく“M”の文字が彫られていた。

「あたしにはR。リヨウのイニシャル」

そういつて差し出された真理の腕輪の同じ金属部分には、確かに

“R”の文字があった。

「じゃあ、Mつてのは……」

「真理。あたしのイニシャルよ」

おずおずと尋ねたミカエルに、真理は夢の中にいるような声で答えた。

「ど、どういうこと？」

ミカエルはわけがわからなくなって真理に尋ねた。真理はその言葉聞いていていいのかいないのか、すぎるような表情でミカエルの腕輪を見つめている。

「リヨウと二人で買ったの。お互いの腕輪に、自分のイニシャルを彫ってプレゼントしたの。……世界にひとつしかない腕輪よ。リヨウ以外の人が、持っているわけない……」

「それを、どうしてオレが……？」

ミカエルが首を捻る。その時、真理の瞳に光が宿った。虚ろだった真理の瞳が、ミカエルの顔に焦点を定める。

だが彼女の瞳は、ミカエルをというより、彼を通してその先にいるはずの誰かを見つめているようであった。

「リヨウ！ やっぱりあなた、リヨウなの？」

真理がミカエルにしがみついて叫ぶ。ミカエルは苦しげに目をそらした。

「わからない……わからないんだ」

「ねえ、リヨウ、リヨウなんでしょ？ あたしを一人にしないで！

ねえ、リヨウ！」

すぎるように叫び続ける真理。

ミカエルの頭の奥を、冷たい氷を押し付けられたようなキンとした痛みが襲う。考えれば考えるほどその痛みは強さを増して、ミカ

エルを苦しめる。

「くそっ！ わけがわからない！ オレはどうしたらいいんだ！」

ミカエルは吐き捨てるように呟いて、真理の手を振りほどいた。

「待って、行かないでリヨウ！」

血を吐くような真理の叫び。

だがミカエルは振り返らず、逃げるように窓の外へ走り去った。

「行かないで！ もう一人にしないで！ リヨウ！」

真理の叫びも虚しく、ミカエルの姿は窓の向こうに消えた。真理が窓に駆け寄ったときには、彼の姿はすでにどこにもなかった。

「リヨウ！」

ミカエルの姿が窓の外に消えた後も、真理は声を限りに叫び続けた。顔は流れる涙でぐしゃぐしゃになり、その声も叫び疲れて噎れ果てている。

だがそれでも、真理は噎れた声を振り絞って叫び続ける。そうすれば彼を取り戻すことができるというわけでもないのに。

「ご覧なさい、このままではあなたは苦しむばかりです」

不意に、声が聞こえた。

地獄の底から響くような、しかしそれでいて甘い麻薬のような声。

気がつくとも真理の傍らに、闇色のスーツをまとった男　メフィ

ストが立っていた。

「さあ、全てを忘れてしまうのです。そうすれば、何も悲しいことはなくなりませよ」

メフィストの言葉は、枯れ果てた真理の心には、この上もなく甘美だった。

それでも真理は、残った僅かな理性をフル動員して、闇色の男に尋ねた。

「私が忘れてしまったら、リヨウはどうなるの？」

「初めから存在しなかったことになりました。人間の存在というのは脆いものです。死んでしまえば、誰かの記憶の中にしか存在できない。ですから、あなたが彼を忘れれば彼の存在はこの世から消え去

る」

「そうしたら、リヨウは！」

最後の力を振り絞って甘い誘惑に抗おうとする真理に、メフィスは咎めるような視線を向けた。

「真理さん。何度も言うようですが、リヨウという人間は死んだのです。死者は何も与えてはくれない。死んだ者を思い出すことは、生きているあなたを苦しめるだけです。それならば、全て忘れてしまえばいい。あなたを苦しめる存在など、初めからなかったことにしてしまえばいい。そうすればあなたは、苦しみから解放されるのです」

「……」

真理にはもはや、抗う力は残っていないかった。メフィストの言葉を聞き流すには、真理にとってリヨウの存在は大きすぎ、彼の死の記憶は苦しすぎた。

真理が何も言えなくなったのを見て、メフィストは満足そうに唇の端を吊り上げた。

「さあ、全て、忘れるのです」

ことさらにゆっくりと、メフィストが告げる。

真理は彼の、スーツと同じ闇色の瞳を見上げ、ゆっくりとうなずいた。

第八章

静かな教会の廊下に、けたたましい靴音が響いた。

ラファエルが手にした本から視線を上げると、彼のいた礼拝堂の扉が乱暴に開かれるのが、ちょうど同時だった。

「先生！ ラファエル先生！」

礼拝堂の扉が開くと同時に飛び込んできた人影が、叫んだ。

「何ですか、騒々しい」

ラファエルが人影　ミカエルに、咎める声をかけた。

ミカエルはそれに答えることもなく、切羽詰った表情でラファエルに詰め寄った。

「教えてください！　オレはいつたい何者ですか？　リヨウってのは誰なんです？」

ミカエルの言葉に、ラファエルは僅かにその眉をひそめ、手にした本をぱたん、と閉じた。

「ふう、どうやら知ってしまったようですね」

「教えてください！　オレは、オレはリヨウなんですか？」

なおも詰め寄るミカエルに、ラファエルはふつと目を伏せた。

「……時が来れば、全てを思い出すでしょう」

「先生！」

煮え切らないラファエルの反応に、ミカエルがさらに詰め寄ろうとした、その時。

ミカエルの視界が、揺らいだ。

いや、揺らいだのはミカエルの身体の方だった。突然足に力が入らなくなり、ミカエルは思わず膝をついた。

全身から力が抜け、頭が割れそうなほどに痛い。

「うっ……」

「大丈夫ですか、ミカエル？　……これは！」

突然しゃがみこんでしまったミカエルを心配そうに覗き込んだラ

ファエルが、目をみはった。

「いけない。ミカエルの存在が、消えかけている！」

よく見れば、ミカエルの身体の輪郭がぼやけ、その肉体を通して向こう側にあるはずの壁がうつすらと見えていた。目の前で、ミカエルの肌が文字通り透きとおってゆくのである。

「そ、存在、が？」

ミカエルが、彼の頭を襲う激痛に耐えながら、かすれた声を出した。それに答え、ラファエルが小さくうなずく。

「我々天使は、人間の“思い”によって存在しているのです。人間は、例え肉体は死んでも誰かが彼を思う気持ちがある限り、その魂は人々を見守り続けることができますのです」

ラファエルは、そこでいったん言葉を区切った。そして一つ大きく息を吸い込んでから続ける。

「しかし、その彼を強く想う者が、彼の存在を忘れた時……」

「天使は、その存在を、失う？」

ミカエルの言葉に、ラファエルはうなずいた。

「そうです。あなたのことを強く想う者が、今あなたを忘れようとしている」

「オレのことを、強く想う者……」

ミカエルの脳裏に、泣き叫ぶ少女の姿が浮かんだ。

「真理……」

その時、左手首にほのかな温かさを感じてふと見ると、そこに巻かれた腕輪が青白い光を放っている。

「これ、真理と……リヨウの」

突然輝き始めた腕輪を不思議そうに見つめ、ミカエルは恐る恐る右手で腕輪に触れる。

ミカエルの脳内を、光が、走った。

圧倒的な量の情報が、ミカエルの全身を駆け抜ける。身動きできなくなるほどの衝撃が彼に襲い掛かった。

『なあ、真理。ずっと一緒にいような』

突然ミカエルの脳裏に響いたのは、彼自身の声だった。いや、この声は……。

「リヨウの、声」

ミカエルは呟いた。

覚えている。いや、思い出した。

それはこの腕輪を買った日、リヨウと真理が交わした言葉。

彼が、真理と交わした言葉。

「急にどうしたの？」

リヨウの声に答える、ちょっと笑った真理の声。それもやはりあの時のものだ。

「いや、なんとなくさ」

「うん」

リヨウの照れたような声が続いた。

「オレさ、いますっげー幸せなんだ。真理と一緒にいて」

「あたしも、だよ」

はにかむような真理の声に、リヨウが小さく笑った。

「へへっ。うっわー、オレ今、すっげー恥ずかしいこと言っちゃまった」

「ふふっ、ほんと、どうしたの？」

「なんとなく、さ」

ミカエルの頭の中で、その声はゆっくりと消えていった。

彼は軽く頭を振って、静かに立ち上がった。

優しく暖かくて幸せな、あの日の光景。

それは間違いなく彼が　リヨウが真理と過ごした時間。

「すべて、思い出したのですね」

ラファエルが優しくミカエルに声をかけた。ミカエルが、静かにうなづく。

「行きなさい、ミカエル。いえ、リヨウ。真理さんのもとへ」

ラファエルの励ましの言葉にミカエルは　リヨウは力強くうなずいた。

真理、オレは忘れたくない。お前に忘れて欲しくないんだ。
オレたちの記憶を。

リヨウは、心の中でそう呟くと、真理のもとに向かって走り出した。

第九章

ミカエルは、疾走していた。

彼の身体は風を切って街を駆け抜け、彼の柔らかな黒髪が風になびいていた。

彼の目指す先は一つ。彼の　　リョウの最愛の恋人、真理のもとへ。

忘れてほしくないんだ、真理。

彼を喪って苦しむ恋人のもとへ、ミカエルはひたすら走った。

「どこへ行くつもりだ」

まっすぐに目的を目指してひた走るミカエルに、低い声がかけられた。

ミカエルが振り返ると、そこに闇色のスーツをまとった男が立っていた。

「真理のところだ！ あいつに記憶を失わせるわけにはいかない！」

ミカエルは、男　　メフィストの瞳をまっすぐに見据えて答えた。

その視線を余裕の表情で受け止めて、メフィストは馬鹿にしたように唇の端を吊り上げた。

「もう遅い。あの娘が記憶を失うのは、もはや時間の問題だ」

「だったらなんとしても、止めなきゃ！」

「止めてどうするつもりだ？」

あわてて走り出そうとするミカエルの背に、メフィストが冷たい声をかけた。

メフィストの言葉に、ミカエルは振り返って叫ぶ。

「オレと真理の思い出は、あいつにとって大切なものなんだ！ それを、失っちゃだめなんだ！」

強い口調で話すミカエルに、メフィストは大げさに肩をすくめて見せた。

「大切な思い出？　ふん！　お前の言っているのは、綺麗事に過ぎ

ん

皮肉げにため息をついて、メフィストは続ける。

「あの娘の最愛の人物であるリヨウは死んだ。そしてそれ以来、リヨウの記憶は彼女を苦しめ続けている。あの娘は自ら記憶を消すことを望んだのだよ。自分を苦しめる忌まわしい記憶をな」

勝ち誇るようなメフィストの言葉に、ミカエルははっと息を飲んだ。それを認めると、悪魔はミカエルの心臓にナイフを突き込むように言葉を放った。

「それを、止めると言うのか？ 貴様が？ 止めてどうする？ いたずらに彼女を傷つけるだけだろう？」

皮肉な笑みを浮かべながら、彼を追い詰めるように問いを重ねるメフィストに、ミカエルは苦しげに頭を抱えた。

「オレの記憶が、真理を苦しめている……？」

血を吐くようなミカエルの呟きに、メフィストは満足そうにうなずいた。

「その通りだ。だからこそ、彼女は選んだのだよ。自分の中から、お前の存在を消し去ることを。リヨウという人間の存在を、はじめからなかったことにすることを」

「……」

「無駄な努力はやめるんだな。あの娘は、記憶を取り戻すことなんて望んじやいない。そして、彼女に忘れられたお前は、まもなく消える」

そう言うときメフィストは、芝居がかった姿でミカエルに向けて一礼して見せた。

「さらばだ、ミカエル。いや、リヨウだったかな？」

闇色のスーツをまとった悪魔は、不敵な笑みを浮かべると、闇に溶けるように立ち去っていった。

「……あいつの、言う通りなのか」

一人残されたミカエルは、呆然とその場に立ち尽くしていた。

「オレの記憶は、真理を苦しめるだけなのか？ オレがはじめから

存在しなかった方が、真理にとってはよかったのか？」

ミカエルは苦しげに顔をゆがめた。無意識に、右手が左手首の腕輪に触れる。

彼の脳裏に、いつかの光景が甦った。リョウが真理と共にいた日々の記憶。暖かく、やさしい感情がミカエルの心を包む。

この感情を、失いたくない。

「オレにはわからない……。だけど、オレは忘れてほしくないんだ」
ミカエルは再び前を向き、走り出した。

第十章

「真理！ 真理！」

静寂と闇が、そこにいる者の精神を蝕んでゆくような、孤独な部屋。そんな雰囲気を作り裂くように、ミカエルが部屋の中に飛び込んできた。

部屋の主である少女、真理は突然の闖入者に冷たい視線を投げかけた。唇を横一文字に引き結び、何かに耐えるような表情でミカエルを睨みつける。

「聞いてくれ、真理！ 全部思い出したんだ！ オレはリヨウだったんだ！」

ミカエルが叫ぶ。その瞳はまっすぐに真理を見つめている。

「……」

真理は何も言わずに目をそらした。彼のまっすぐな視線が、痛い。「なあ真理、聞いてくれよ！」

何も答えない真理に焦れたように、ミカエルが真理の方に一歩踏み出そうとした。

「来ないでっ！」

真理の、悲鳴のような叫びが部屋に響いた。

突然の大声に、ミカエルは凍りついたように動けなくなる。

「……真理？」

呟いた声は、かすれていた。

真理の叫び、それは明確な拒絶だった。

あの娘は、記憶を取り戻すことなんて望んじやいない。

ミカエルの脳裏に、メフィストの言葉が甦った。

「リヨウは」

真理が口を開いた。嗚咽を堪えているような、震えた声。

「リヨウは、死んだの。お願いだから、これ以上あたしを苦しめないでー！」

震えた叫びは痛々しく、苦しげだった。

「リヨウは、リヨウはあたしの全てだったの。いつだってあたしのそばにはリヨウがいた。街を歩いてても、家にいても、どこにだってリヨウとの思い出があって……」

呟くように紡ぎ出すように、真理は言葉を続ける。泣きはらした赤い目から、不意に涙が一筋、零れて落ちた。

「だけど……だけど、もうリヨウはいないの！ リヨウのことを思い出すたび、もうリヨウはいないんだって、改めて思い知るのよ！」
ヒステリックに叫んで、真理がその血走った目を、咎めるような視線を、ミカエルに向けた。

「……」

ミカエルは、何も答えられなかった。

何を言えばいいというのだろうか。リヨウの死は真理を苛み続け、この一年の間彼女の心が休まることは一度たりとも無かったのだ。

その苦しみは、彼女自身の他には誰にも理解することはできないように思えた。

「だから」

不意に真理が、呟くように言葉を発した。先ほどまでの熱っぽい、震える声とは違う。全てを諦めたような、渴いた声。

「いつそのこと忘れてしまえば。全て忘れてしまえば、こんな思いをしなくてすむのかな……」

消えてしまいそうな、真理の呟き。その姿がたまらなく悲しくて、ミカエルは激しく頭を振った。

「……全部、忘れちゃうのか？ オレのことを。オレが、この世界にいたってことを」

苦しげに呻いたミカエルの言葉に、真理は答えなかった。ただ虚ろな瞳を、部屋の中に漂わせている。

「嫌だよ……」

絞り出すように、ミカエルが呟いた。その目は変わらずにまっすぐと、真理に向けられている。

虚ろだった真理の瞳に、かすかに光が宿った。いぶかしむような目が、ミカエルに向けられる。

「いやだ……忘れてほしくない。今は、たとえ悲しい記憶でも、オレが、オレがこの世界にいたってことを覚えていてほしいんだ！」
ミカエルが叫んだ。まっすぐに純粋な、心の底からの叫び。その純粋さが真理にはひどく暖かかくて、そしてひどく痛かった。

「……………」
それでも真理は、やはり何も言えなかった。ぎゅっと目を閉じて、顔を背ける。

「オレの、わがままなのかな。忘れてしまった方が、真理のためなのかな」

そう言ったミカエルの声は、ひどく弱々しかった。それはひと吹きで消えてしまふ、儚いろうそくの炎のよう。

「……………」
「リヨ、ウ？」

真理が、ぎこちなく言葉を発した。その言葉は小さすぎて、ミカエルに、リヨウに届かない。

「でも、お前がオレのことを忘れてしまったら、全てが消えてしまふ！ オレが、お前とここにいた証が全て。それが……それが、何よりも怖い」

呟いて、ミカエルはうなだれた。がっくりと膝をつき、肩を落とすてうつむく。

糸が切れたように、ミカエルはその場に座り込んだ。

「……………」

違う、何かが違う。このままではいけない。

真理の胸の奥の方で、何かが騒いでいる。

「ごめんな、全部オレのわがままだよ。オレのせいで真理は、ずっと苦しんだんだもん。もういいよ。もういい。ゆっくり休んでくれ」

そう言ったミカエルは、燃え尽きたように虚ろな表情だった。彼の瞳はもはや、輝いていない。

「……よくないよ」

我知らず、真理は呟いていた。キツと、潤んだ瞳をミカエルに向ける。

驚いたようなミカエルの瞳に、輝きが戻った。

「リヨウのバカ！ いいわけないじゃない！ 忘れるわけ、無いじゃない……！」

最後の方は、溢れる涙と嗚咽で言葉にならなかった。

「……真理？」

「今まで散々心配かけたんだからね！ 絶対に忘れてなんかあげないんだから！」

胸の奥からあふれ出してくる思いをぶちまけるように、真理は叫び続けた。

「……ごめん」

リヨウの、優しく暖かい声。それは、真理との待ち合わせに遅れた彼が、小走りで駆け寄りながら言ったあの日の声とおんなじで。

「謝ったって、許してあげないわ」

だから真理は、嗚咽を堪えてできるだけ胸を張って、そう言った。「え？」

呆気にとられたような、ちょっと間抜けなリヨウの顔。暖かい何かが、真理の心を満たした。

「……この先ずうつと、あたしのこと見守ってて」

そう言って真理は、微笑んだ。一年ぶりの、心の底からの笑顔。

「……ああ」

リヨウも、優しく微笑んだ。ぽん、と暖かい手が、真理の頭を撫でる。

「約束だからね」

「ああ、約束する」

真理の中で、張りつめたものが、優しく溶けていった。

「バカ！ 何で死んだのよお！」

真理はリヨウの胸にしがみついて、声を上げて泣いた。

「ごめん、な」

リヨウが優しく、その華奢な身体を包んだ。真理の背中に腕を回し、壊れやすいガラス細工のように優しく静かに、その身体を抱きしめる。

窓の外では、粉雪が舞い始めていた。二人を祝福するように、真っ白な雪は、街を静かに染めていった。

エピローグ

忘れてしまいたいくらい悲しい思い出もあるかもしれませんが、忘れることでしか、その傷は癒せないのかもしれないかもしれません。

けれど、私は思います。

悲しみも苦しみも、すべてを胸の中にしまつて、留めておこう。その人が生きていた証を、忘れないでいよう。

時は、思い出の形を少しづつ変えていくでしょう。

しかし、形は変わっても、それは大切に心に留まり続けます。

彼が天使に姿を変えて、彼女を見守り続けるように。

さて、これがミカエル君のお話でした。いかがだったでしょうか。おっと、自己紹介が遅れてしまいました。私はラファエル。

お話の中にも登場した、ミカエル君の上司であり、担任でもある天使です。

私のことはどうでもいいですね。みなさんが気になるのは、きつとミカエル君……いえ、リョウ君と真理さんのことでしょうか。

あ、ほら、二人がやってきましたよ。

「おいおい真理〜。これは買いすぎだろ〜!」

そんなことを言いながら、山ほど買い物袋を提げてやってきた紺色のコートの少年、あれは紛れも無くリョウ君です。

「だって、せつかく今日は荷物持ちがいるんだもん。有効利用しなきゃ」

そう言つて、リョウ君の腕に寄り添っているのは真理さん。白いコートを着て、ピンクのマフラーをした彼女は、本当に幸せそうな笑顔を浮かべています。

「おい、荷物持ちはないだろ〜」

「はいはい、感謝してるよ! さ、次の買い物」

「まだ買つのかよ」

「リヨウ、早くしないと置いてくわよ」

そんなことを話しながら本当に楽しそうに、二人は道の向こうに走って行ってしまいました。彼らの歩いた足跡が、白い雪の上につきすらすら残っています。夜の冷たい空気が、二人の行く末を祝福しているようにさえ、私には思えます。

そう、彼は真理さんとともに幸せに暮らしているんです。

え？ そんなのありかよ、ですって？

ふふ、いいんですよ。

だって、今日は、クリスマスですから。

年に一度だけ、奇跡が許される日。

< f i n >

エピソード（後書き）

最後になりました。

ラストは賛否両論あるでしょうが、暖かさを感じていただきたくてこのようにしました。

ラストまでお付き合いいただき、ありがとうございました。
これからもよろしく願っています。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2494a/>

キセキ ~ Angel of Memories ~

2008年11月7日07時23分発行